

子供から大人まで新鮮な感動を 素手の組み合わせによる影の動物たちは 命を得て、ダイナミックかつ繊細に躍動する

劇団かかし座

誰もが幼い頃に遊んだキツネやイヌなどの手影絵。それをビジネスにしてみましたのが、劇団かかし座（横浜市都筑区南山田町、後藤圭代表取締役、045・562・8111、<http://www.kakashiza.co.jp>）である。

昭和27年創立の同社は、日本で最初にできたシャドウアート（現代影絵）の専門カンパニー。影絵の世界は、人々を夢幻（無限）の想像へと駆り立てる不思議な魅力にあふれている。創立者の後藤泰隆（とうたいりゅう）は、戦後の焼け野原から「子供たちの心に夢を育みたい」の一心で、影絵の世界を独自に切り拓いて来た。創立者の志を引き継ぎ、現在は長男後藤圭氏が二代目社長として、数々の革新的な作品を生み出している。

そのひとつが「ハンドシャドウ」、つまり手影絵である。手影絵は手などの影を障子に映して遊ぶ、昔からある手遊び。これを独自に動物や植物など100種類以上を考案、現代風にアレンジし、ひとつの舞台パフォーマンスとして完成させ、海外のフェスティバルなどで毎年絶賛を浴びることとなった。

また、創立以来、同社最大の特長となっているのが、創立者考案の「ハーフトーンシルエット」という影絵の技法。NHK専属劇団であった創立当初よりその独特の美しさは各方面から根強い支持を得ており、ポスター、絵本、店舗装飾に提供している。「まだまだ絵の分野としては一次産業のように



かかし座独自のパフォーマンス「ハンドシャドウ」で躍動するキリン

素材提供しているに過ぎない。今後はグッズなどの製作販売にも着手していきたい」と後藤社長は語る。同社は、これら美しい現代影絵の技法を駆使し、古今東西の名作やオリジナルの影絵劇の公演を官公庁や小学校等教育関係を中心に年間1000ステージ以上こなしている。一般向けの公演では、今夏に『オズの魔法使い』の公演（8月25日鶴見区民文化センター・8月27日府中の森芸術劇場）を控えている。

今年の夏は、予想を上回る大きな規模の影絵劇を観に親子で足を運んではいかがだろうか。



独特の美しさが高く評価されている「ハーフトーンシルエット」